

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association Between Maternal History of Mental Illness and Neurodevelopment of Children During the First Three Years: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

精神疾患の既往のある母親と子どもの3歳までの精神神経発達との関連について: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 高知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports

年: 2025 DOI: 10.1002/pcn5.70073

筆頭著者名: 大原 伸騎

所属 UC 名: 高知ユニットセンター

目的:

母親の精神疾患の既往が子どもの精神神経発達に与える影響について、これまで十分な調査が行われていない。そこで本研究では、母親の精神疾患の既往と、子どもの早期の精神神経発達との関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加した 64,389 組の母子データを使用した。母親の精神疾患(うつ病、不安障害、統合失調症)の既往の情報は、妊娠初期の自己記入式質問票から得た。子どもの精神神経発達は、1、2、3 歳時の日本語版 ASQ-3 の結果を用いて、5 つの領域(コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会)について評価した。母親の精神疾患の既往と子どもの 3 歳までの精神神経発達との関連について、多変量ロジスティック回帰分析を行った。

結果:

母親にうつ病、不安障害、統合失調症のいずれかの精神疾患の既往がある場合、既往がない場合と比較して、子どもが 1 歳時点で、粗大運動および問題解決領域において発達遅滞リスクが有意に高かった。さらに 2 歳および 3 歳時点では、5 つ全ての領域で発達遅滞リスクが有意に高かった。

考察(研究の限界を含める):

本研究では、母親の精神疾患の既往と子どもの精神神経発達に関連する可能性が示された。この関連には、遺伝要因や育児環境の関与に加え、妊娠前の精神疾患が妊娠中のメンタルヘルスを介して子どもの発達に影響を与える可能性も考えられる。本研究の限界としては、自己申告による精神疾患の過少報告の可能性や、標準化された診断基準を使用していないこと、および母親の精神疾患の発症時期や持続期間の情報が不明確であるといった点が挙げられる。さらに、妊娠中の母親の精神状態や育児環境、母親の発達障害特性などの要因が子どもの神経発達に与える影響についても十分に考慮されていないため、これらの点を踏まえて、さらなる研究が求められる。

結論:

本研究の結果から、母親に精神疾患の既往がある場合、1 歳時点で粗大運動および問題解決領域の発達遅滞リスクが高いことを認め、2 歳および 3 歳ではすべての領域で発達遅滞リスクが高くなる可能性が示された。これらの結果から、特に生後 1 年以内の早期から適切な介入や育児支援を行うことが、こうした子どもたちの精神神経発達を促進する上で重要であると考えられる。